

史跡 大石塚・小石塚古墳

— 環境整備事業報告 —

1982年3月

豊中市教育委員会

# 序 文

大石塚・小石塚古墳は、西暦4世紀末頃に築造された前方後円墳で、桜塚古墳群の西群に位置する豊中市内では唯一の国指定の史跡です。両墳は原田神社の神域として、その所有し管理するところでありましたが、国の史跡公有化事業補助を受けて昭和47、48年度の2ヶ年度に豊中市が同神社から買収を行ない、その後は豊中市が管理するところとなりました。

当史跡の復元、整備事業は、公有化以来の念願としてその実現が待たれましたが、昭和54年度に至って国および大阪府の補助を受けて一部着手することができ、昭和56年度まで3ヶ年を要してこのほど完成をみることになりました。その間いくたの問題に直面いたしました。関係各位のご指導とご協力によって事業の完遂がなりましたことは、誠にご同慶にたえません。

本書は、史跡大石塚・小石塚古墳環境整備事業の完成を機にその概要をとりまとめたものです。遺跡の保存と活用にいささかなりとも寄与するところがあれば幸いです。

終りにあたって、この事業のために多大のご支援とご指導を賜りました文化庁、大阪府教育委員会、またご指導とご協力をいただきました諸先生をはじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。

昭和57年3月

豊中市教育委員会

教育長 湯 元 英 世

# 本文目次

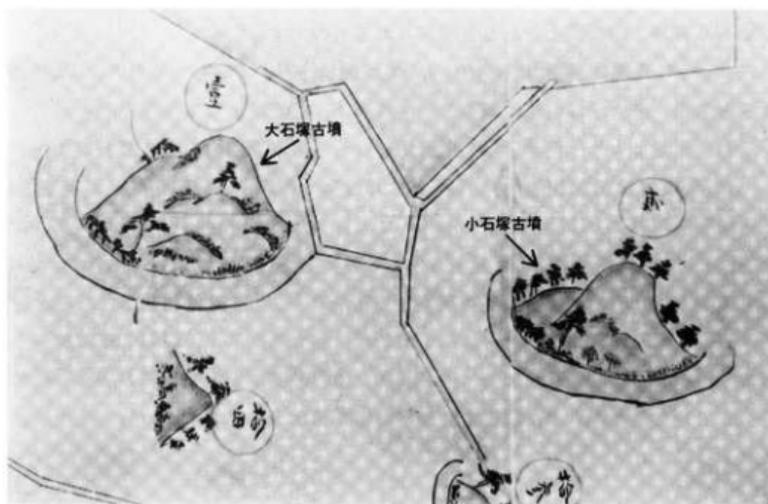
I	史跡大石塚・小石塚古墳の概要	1
II	位置と環境	4
III	経過	
	(1) 事業の推移	6
	(2) 整備の方針	7
IV	調査の概要	
	(1) 小石塚古墳	11
	(2) 大石塚古墳	23
	(3) まとめ	41
V	整備	
	(1) 小石塚古墳	46
	(2) 大石塚古墳	48
	(3) 開放地区	48
VI	あとがき	52

## I 史跡大石塚・小石塚古墳の概要

史跡大石塚・小石塚古墳は、昭和31年5月15日に国の指定を受けた豊中市唯一の史跡です。面積は7428.92㎡(実測値)を有し、城内には樹高10m以上に生長した自然樹木が生育しています。その樹種は郷土木としてあげられるクスギ、コナラ、エノキ、ムクノキ等の落葉樹、クスノキ、モチノキ、クロマツ等で構成されています。当樹林は阪急岡町駅東側の原田神社の樹林とともに貴重な残存林となっています。

当史跡は国の史跡公有化事業に係る補助を受けて原所有者である原田神社から買上げを行ない、その後は豊中市が管理団体となりましたが、古墳はその名称からも察せられるように、大小2基の前方後円墳から成り、両墳はほぼ南北を主軸とする同一線上に並ぶ特異な外観を呈しています。周辺一帯が住宅や商店の繁華な市街地となり、既に大半の古墳が消滅の運命をたどるという条件下にありながら、奇跡的に破壊を免れ、しかも比較的良好的状態を保って現在に至ります。このことは両墳を含む広大な一帯がかって原田神社の所領にかかると山林であり、最近に至るまで同神社の聖域として、秋の獅子神事にかかわる祭祀の場であったということと無関係ではないでしょう。因みにこの原田神社旧境内地は古く天明年間、弥生時代における最も特色ある遺物の一つである銅鐸2口が出土したことで知られるものです。

周知のように両墳は桜塚古墳群内にあって、他に今日まで現存するものは大塚古墳、御獅子塚古墳、南天平塚古墳があり、いずれも市指定史跡として保存が図られています。なお、記録によれば明治7年大阪府知事から古墳取調べのあったことがうかがわれ、「大阪府摂津国豊島郡桜塚村壱目三拾六墳全図」と題する絵図が残っております。また古墳取調べのことは明治12年、同14年にも行われたと見え、それぞれ「三十六墳所在総図」「諸墳略図面書上」と題する個々の写生図を付した報告が行われています。それらによって往時の桜塚古墳群を察することができます。明治の記録にみる大石塚古墳は東西25間、南北48間、後円部高1丈7尺、前方部高7尺、堀幅3間4尺～4間半とあり、小石塚古墳は東西16間、南北32間、後円部高1丈1尺、前方部高6尺で周濠を有していたことがうかがえます。今日では周濠は全く見えずその跡が確認されたにとどまります。



第1図 明治の絵図面 (豊中市史より)



- |               |             |                |
|---------------|-------------|----------------|
| 1. 螢池西遺跡      | 9. 原田神社出土銅鐸 | 17. 豊島北遺跡      |
| 2. 御神山古墳      | 10. 下原竊跡群   | 18. 利倉北遺跡      |
| 3. 南刀根山遺跡     | 11. 原田遺跡    | 19. 利倉遺跡       |
| 4. 新免宮山古墳群    | 12. 曾根遺跡    | 20. 椎堂遺跡       |
| 5. 金寺麁寺(新免麁寺) | 13. 城山遺跡    | 21. 利倉西遺跡      |
| 6. 新免遺跡       | 14. 田能遺跡    | 22. 上津島猪名川川床遺跡 |
| 7. 新免上佃古墳     | 15. 勝部遺跡    | 23. 服部西遺跡      |
| 8. 桜塚古墳群      | 16. 曾根南遺跡   | 24. 穂積遺跡       |

第2図 周辺遺跡分布図

## Ⅱ 位置と環境

豊中市は大阪平野の北西にあって、豊かな大地のもとで古くから人々の生活が営まれてきた地域でありました。豊中市と吹田市にまたがる千里丘陵は、万葉に詠まれた鳥熊山（標高133m）を頂点として、いくつかの小丘陵に派生しながら大阪湾方向に緩傾斜しますが、古来から風光明媚なところとして親しまれて参りました。その南西方向にはり出した一支丘陵上に立地する大石塚・小石塚は、北西方向に流れる千里川、東方を南北に流れる天竺川によって挟まれた、標高50mから20mにゆるく傾く台地の南西端に位置し、西方の西摂平野に望みます。

周辺は西方の低地、猪名川によって形成された沖積平野に多くの集落遺跡が知られています。弥生時代の著名な田能遺跡、勝部遺跡をはじめ、空港A・B地点遺跡、利倉遺跡、利倉西遺跡、上津島川床遺跡、穂積遺跡、島田遺跡、庄内遺跡と南下するに従って時期も下り、古墳時代以降定着しているようです。このように低地においては集落遺跡も多く明らかになりつつありますが、台地上の遺跡についてはあまり多くは知られておりません。そのうち時代の古いものから記すと、縄文時代後期前半を中心とする野畑遺跡や、石鏃等が散布する上野遺跡が台地の奥まった所に位置しております。また弥生中期の方形周溝墓群として著名な宮の前遺跡の付近、蛭池北遺跡があります。そのほか千里川沿いに奥まった所からは中期の野畑春日町遺跡、平野部に出る丘陵上刀根山丘陵の最南端に南刀根山壺棺出土遺跡、その対岸に同じく後期の新免遺跡などが若干知られています。また南方の台地上には最南端で後期の曾根遺跡、竪穴住居跡が確認されている原田遺跡があり、古墳時代の住居跡として注目されるものです。東方にも中期の城山遺跡、天竺川沿いの低地にある長興寺遺跡などが知られます。この周辺の弥生時代の遺跡を考える上で興味深いことは、銅鐸が数ヶ所で発見されていることです。ごく近辺に限っても原田神社境内出土のもの、空港A地点付近出土の伊丹市中村銅鐸、利倉遺跡出土の飾耳片などがあり、勝部、田能遺跡の東方をとりまく地点で出土しています。

ここで古墳に目を転じてみると、北方より猪名川右岸長尾山系に所在する万籟山古墳、その左岸にある惣三堂古墳、池田茶臼山古墳、待兼山古墳、御神山古墳、新免上佃古墳と、前期古墳の内容を示す古墳が独立高所に位置し、西摂平野を望みます。中期古墳としては北摂最大の桜塚古墳群が著名です。現在は大石塚・小石塚古墳を含め、大塚古墳、御獅子塚古墳、南天平塚古墳とわずから5基を残すにすぎませんが、幸いにも明治の古図と記録によって、今は消滅し去った古墳を知ることができます。それに

よれば総数36基、墳形は前方後円墳、円墳、方墳で半数以上が周濠を有し、大きく大石塚・小石塚古墳を中心とした西群と、大塚・御獅子塚古墳を中心とした東群によって構成されています。そのうちでも、西群においては大石塚・小石塚古墳を中心に20基がかたまつて存在し、他は周辺に点在しています。20基のうち前方後円墳が3基、他は円墳で大石塚・小石塚古墳を中心に北側と南側に集中します。立地の条件としては、小石塚古墳の北側円墳群が丘陵最高所からのゆるやかな斜面に位置し、他の古墳はそれより下った平坦部に位置しています。また東群は前方後円墳2基、方墳1基、他は円墳で構成されます。立地の条件は平坦な台地上に同じように位置し、そのうち狐塚、北天平塚、南天平塚古墳が調査されて内容のわかる古墳でもあります。後期の古墳は、新免宮山古墳群と太鼓塚古墳群がよく知られ、新免宮山古墳群は横穴式石室に陶棺を用いています。その東側には白鳳期創建の金寺庵寺があって、寺と古墳との関係が目立ちます。太鼓塚古墳群は桜井谷古窯跡群中、千里川右岸の丘陵上に立地し、同じく横穴式石室に陶棺を納めております。このように付近の後期古墳は須恵質の陶棺を使用し、また近辺に古窯跡がひかえていることにより、須恵器生産者集団との密接な関係が想定されるところです。桜井谷窯跡群は陶邑古窯跡群（大阪南部古窯跡群）より若干遅れて生産が開始され、南方より北方に移っていくようです。

歴史時代の遺跡としては、特に山田寺や四天王寺と同範の軒丸瓦を使用する金寺庵寺が猪名川左岸唯一の古代寺院として注目されます。このように弥生時代以降、この周辺が西摂平野東麓の中心として脈々と続いてきたことがうかがわれます。

今日、大石塚・小石塚古墳の周辺は住宅が密集し、多くの古墳・遺跡が破壊されて昔日の面影はうかがえませんが、幸いにも両古墳は古代の姿を今日までよく残し、良好な緑地を形成して現代に住まう私達のふるさととなっております。

### Ⅲ 経 過

大石塚・小石塚古墳は、昭和31年（1956）5月15日に国の史跡に指定され、原田神社の管理のもとに一層手厚く保護されて参りましたが、近年の著しい都市化の中にあつて多くの史跡、古墳が消えゆく運命にあるも比較的良く保存されてきたことは、当墳が原田神社の聖域であつたことに起因するものです。阪急電車岡町駅一帯が住宅地として、また商店街としてその環境が変貌する中で、付近住民にはこよなく憩いの場としての緑地であり、自然に接することのできる数少ない地域として親しまれて参りました。しかし、周辺環境変化に伴つて古墳の保存を維持することの困難も顕現し、古墳の保存と市民への活用をはかるため全国の史跡指定地域公有化事業の一環として、豊中市は文化庁、大阪府補助を受けて昭和47・48年度の2ケ年にわたり、原所有者である原田神社から史跡買上げを行つたものです。以来当史跡は豊中市の管理に引継がれることとなりますが、史跡公有化が行われた後は環境整備事業による古墳保存と内域の開放（公園化）の実施が急がれることになりました。

史跡の公園化については地元住民、とりわけ当史跡を校区に有する克明小学校、自治会、諸団体からも早期実現を熱望する力強い働きかけが見られて計画推進の起動力ともなりました。史跡環境整備事業の実施は史跡買収から数年を経た昭和54年度に、国庫補助による一部着工が認められ、55・56年度の3ケ年計画によってその実現を見ることができたものです。

#### (1) 事業の推移

前述のように、史跡公有化は昭和47・48年度の2ケ年に亘り原所有者である宗教法人原田神社と豊中市との間で買上げ契約が交されましたが、総事業費は1億8900万円（国庫補助60%、大阪府補助20%、豊中市20%）で、うち史跡買上額は1億7500万円でありました。

つぎに環境整備（公園化）事業の実施は、当初昭和49・50・51年度の3ケ年計画で工事を始める予定でした。しかし、市内では唯一の国指定史跡であり、古墳の残存状態が良好であることから十分な考古学調査を行ない、さらに市民の活用にあつての全体計画をまとめるため慎重を期することになりました。そして昭和53年には総工費4150万円で昭和54・55年度の2ケ年度完成をめざす案をたてて実現への行程を歩むことになりました。

幸い昭和54年度に国庫及び大阪府補助事業として、その一部着工が認められました

ので、具体的な整備計画案を作成するために必要な古墳の発掘調査を開始しました。

史跡大石塚・小石塚古墳環境整備事業はこれまで見たように史跡買収後5年を経て昭和54年度から着手され、55・56年度の3ヶ年度に総工費6071万円（国庫補助50%、大阪府補助25%、豊中市25%）を要して完成を迎えることになりました。

次に当整備事業を年次別に主な実施内容について概観してみます。

#### 昭和54年度

- 具体的な整備計画案を作成するために必要な大石塚・小石塚古墳の範囲（規模）や、周濠跡の確認など考古学上の基礎資料を得るための発掘調査（調査報告書は1980年3月豊中市教育委員会が刊行済）。
- 発掘調査で得られた資料に基づく設計方針と実施設計。
- 現況地形の測量作業。
- 大石塚古墳の西、南面の外周柵一部施工。

#### 昭和55年度

- 大石塚・小石塚古墳の外周柵施工。
- 小石塚の復元保存工事。

#### 昭和56年度

- 史跡内開放区域の公園化工事。

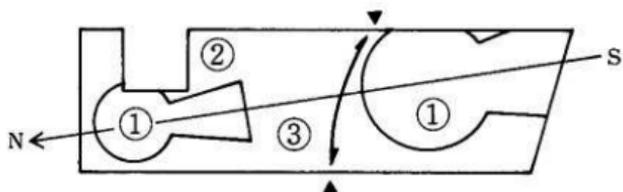
## (2) 整備の方針

### 基本方針

事業の実施にあたっては、住宅地域内での史跡であること、周辺との調和が必要であるとして計画の基本方針を次のとおり設定いたしました。

1. 古墳の復元とともに古墳周辺部の整備を行ない一般の利用に供する。
2. ただし、開放区域は大石塚古墳と小石塚古墳の間の空地に限定する。
3. アクセスは現状の2ヶ所に留め、新たな開口部は認めない。
4. 構造物基礎は極力小さくし、構築する考え方ではなく物を置く考え方で進める。
5. 造成は盛土を原則とする。
6. 現存樹木は極力保存する。
7. 雨水は敷地外には流出させない。
8. 墳墓のみの保存に留まらず、周囲の環境を含む一体的保存に努める。

## ゾーニング



1. 保存区域：過去の遺産に対する保障区域であり  
現状維持的であり過去復元的である。  
利用行為を本質的に否定する。

2. 保全区域：過去の遺産に対する保障区域である  
と同時に将来の遺産に対する創造行為を  
裏づけている。破壊をともなわない  
利用行為を認める。

3. 利用区域：史蹟にふさわしい利用を認める区域

基本方針にもとづいて整備の方針並びに施設計画は次のとおり設定しました。

区 域	方 針	具 体 策
1. 保存区域	○古墳の復元 ○古墳輪郭を明示 ○周濠の明示	造成、地被植物 生垣状植栽 玉石貼り
2. 保全区域	○樹林内の表面排水 ○みだらな侵入防止	部分的盛土整地 排水施設（外周部） 外柵（外周部） 生垣状植栽
3. 利用区域	○人のたまり ○人の通過 ○公園管理 ○散策 ○周辺民家のプライバシーを守る ○夜間安全通行と防犯 ○静的利用、休憩 ○修景	広場 主園路 林内園路 生垣植栽 照明柱 四阿、ベンチ、水呑台 樹木、地被植物 (より質の高い緑)

- 南北軸を空間配置の軸として設定する。
- 広場を樹木の生えていない主園路近くに設ける。
- 広場には四阿を設ける。
- 主園路は大石塚古墳への影響を配慮し、北側に寄せて設ける。
- 主園路の中員は管理の容易さと、防犯上の観点から4mを標準とする。
- 主園路から小石塚古墳まで1mの高低差があり、斜路を設けてスムーズな動きができるようにする。

- 林内園路は巾員1.2mとする。
- 舗装材は自然色を出すため土舗装又は石貼りとする。ただし、主園路は擬石ブロック又はアスファルト舗装とする。
- 縁石は自然石の加工したものとする。
- 侵入防止の生垣状植栽は樹種選択に充分配慮する。



第3図 航空写真

## IV 調査の概要

### (1) 小石塚古墳

西方にはりだした台地上地形の末端、標高約21m前後、に立地しています。南面する前方後円墳で、前方部に向って旧地形も傾斜し、大石塚との間で谷地形を呈しています。前方部が著しく損壊されているにもかかわらず、幸いにも前方後円墳の原形を復元することができました。

#### 1. 墳 丘

主軸線はN-13°27'-Eで、規模は全長49m、後円部基底径29m(推定)、前方部幅21m後円部高3m(現存最高所)、前方部高1.5m(現存最高所)、くびれ部幅14.5m、後円部テラス幅2.5m、後円部中段径16.5mで、後円部墳頂平坦は主軸線より若干西よりになります。このことは、旧地形が南西方向にゆるく傾斜していることと関連して、墳丘築造の際、自然地形の制約を受けていることを示しています。



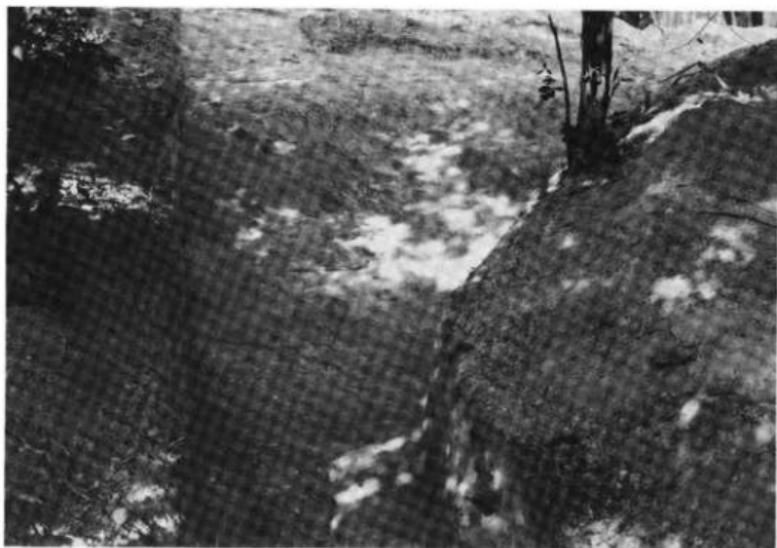
第4図 小石塚古墳 調査前の状況



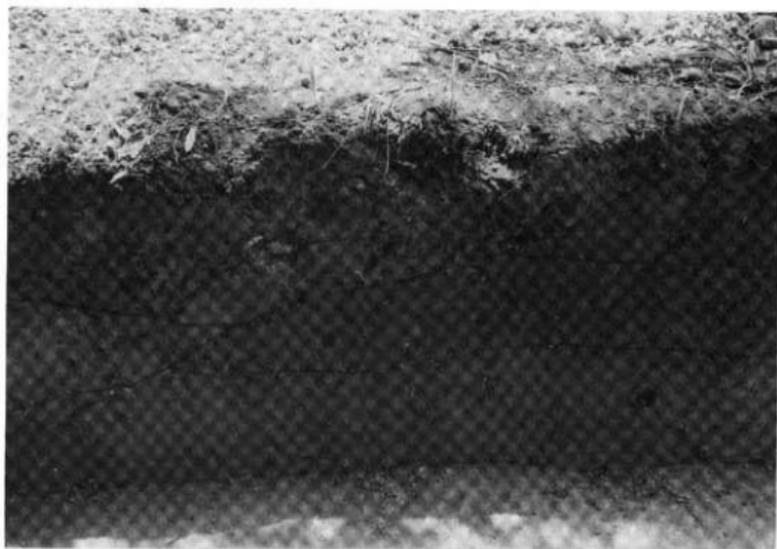
第5図 第1トレンチ 後円部後背斜面



第6図 第6グリッド 東側くびれ部



第7図 第7トレンチ 西側くびれ部



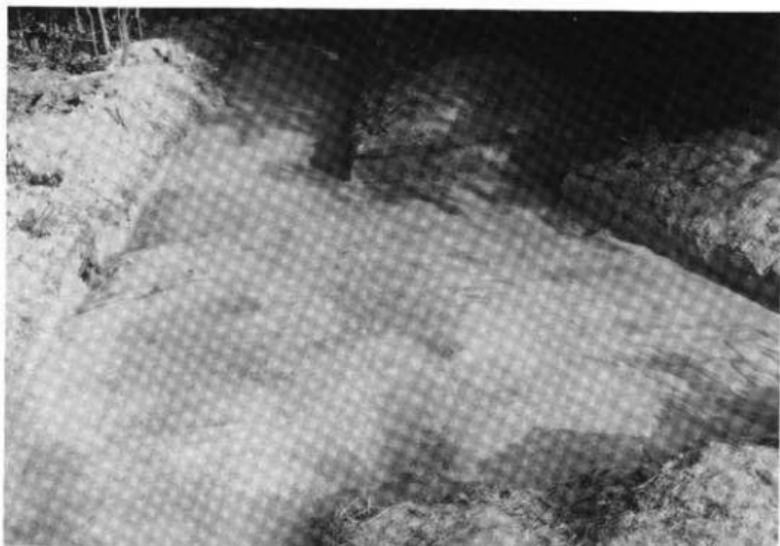
第8図 第8トレンチ 墳丘断面



第9図 第3トレンチ 後円部東側堀状遺構



第10図 第8トレンチ 堀状遺構外側肩部



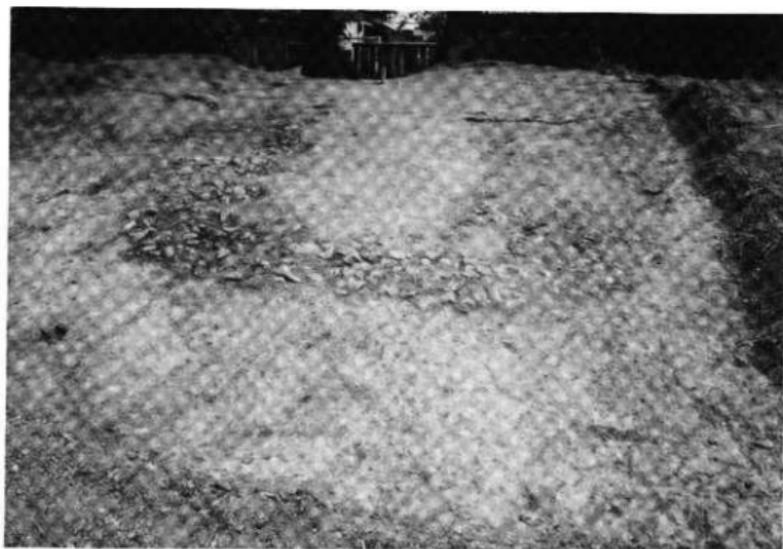
第11図 第10グリッド 前方部東側コーナー



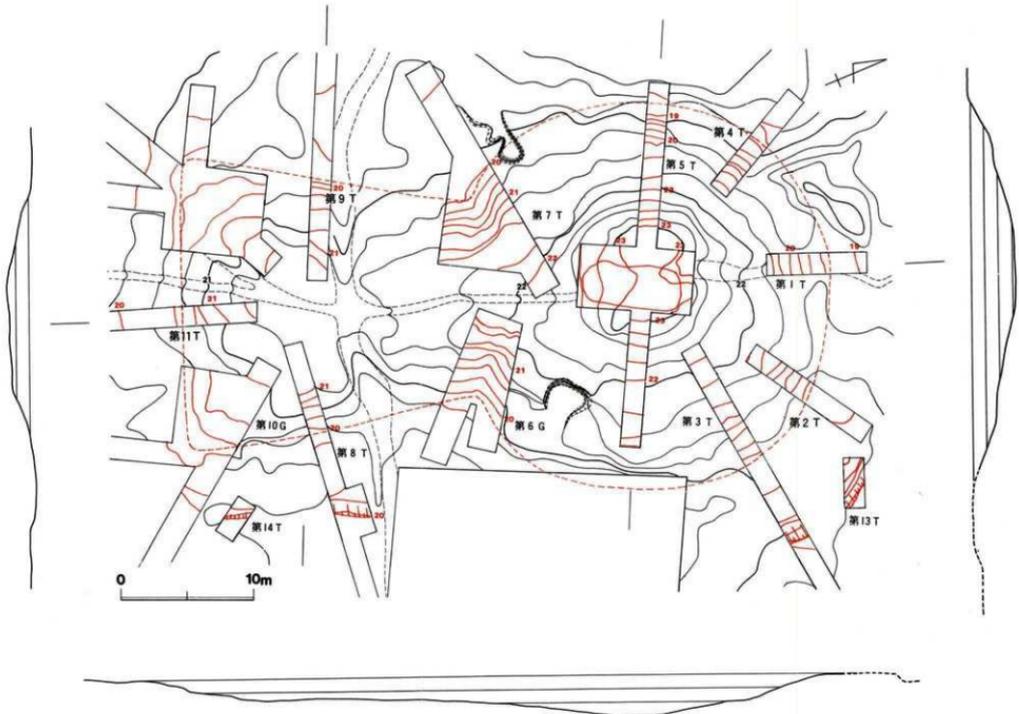
第12図 第12グリッド 前方部西側コーナー



第13図 主体部 上面



第14図 主体部 前方部より



第15図 小石塚古墳 原墳丘測量図

## 2. 主 体 部

調査前の状況において、後円部墳頂が主軸に沿って直行する小道のためにかなり削平されていました。腐植土もなく損壊が著しい状態でありましたので、主体部はすでに消滅してしまっていると思われました。しかし、予想以上に保存状態が良好でした。

そこで、棺外遺物はすでに消滅しているものの本体は完全に残っていると思われましたので、粘土をはって、若干の盛土を行って保存しました。その規模は墓坑長径7.4m、短径3.1mで、短径の両端が隅丸を成しています。埋葬施設は粘土椁で、墓坑の中央に設置されます。内部に外部と同じ土が入っており、被覆粘土上部の墓坑埋土であることがうかがわれ、したがって、棺が腐敗した際に被覆粘土が落ち込み、同じように墓坑埋土も落ち込んだものと思われます。このことにより、棺の規模もだいたい推定されます。そこで検出された平面形での規模と状態を示すと次の通りです。中軸はN-21°-Eで、棺の長さ5.3m、北側の幅75cm、南側の幅55cmで、北側が高く南側との高低差が40cmほどあります。その外側に黄白色の精質の粘土が30cmの幅で残存し、両端だけは広く50cm幅で残存していました。その粘土椁外側の長径は6.3mで、北側、南側とも幅1.3mです。その外側に赤褐色砂礫土の墓坑埋土が礫の上を覆っている状態でした。

調査の結果を簡単にまとめてみますと、

○外部施設として葺石はなく、埴輪も原位置を保ったものは一例もなく出土量も少ない。おそらく古墳全体を密に閉鎖させるのではなく、何メートルか間隔をおいて立てられたものでしょう。

○底部のない壺形埴輪の破片が、両くびれ部と後円部背面第1トレンチで出土しています。このことから、後円部墳頂に円か方形か現在は定かではありませんが、配置されていた可能性が高いと思われます。

○堀も古墳を全周するのではなく、古墳の東側にだけ設けられたもので、しかも、後円部より前方部に移行するに従って規模も縮少し、東側前方部コーナーで消滅するという特異なものです。ただ、後円部背後と西側は住宅地に入るため不明です。しかし西側くびれ部においては検出できませんでしたので、後円部西側で消滅するものとみられます。したがって、堀割的な性格のものと考えられます。

○古墳築造過程における盛土の状態は、墳丘表面観察の結果によると、ある一定の統一によって、大まかな単位で土を変えて盛っているようです。一部分の断面観察ではありますが、地山を削り出して墳形を造り、その上にやや斜め方向に盛土を行い整えているようです。

### 3. 出土遺物

調査の結果、小石塚古墳の墳丘には埴輪のうち、特異な形状をもつ壺形埴輪が圍繞されていたことが明らかになりました。いずれも原形をとどめるものはなく、数量的にも限られています。以下、比較的残りの良い埴輪について述べることにします。

#### 埴 輪

##### (1) 壺形埴輪 (第18図 1~3)

いずれも東側くびれ部より検出したものです。出土層位を異にするため、必ずしも同一個体のものであることはできません。

1. 口縁部で、口径51.4cmを計ります。通常の朝顔形埴輪の口縁に類似しますが、器壁が極めて薄く、屈折部の下に径8mmの円形の穿孔を有します。

2. 頸部で径18.2cmを計ります。肩部との屈折部に突帯を有しない点で、朝顔形埴輪の頸部とは異なります。

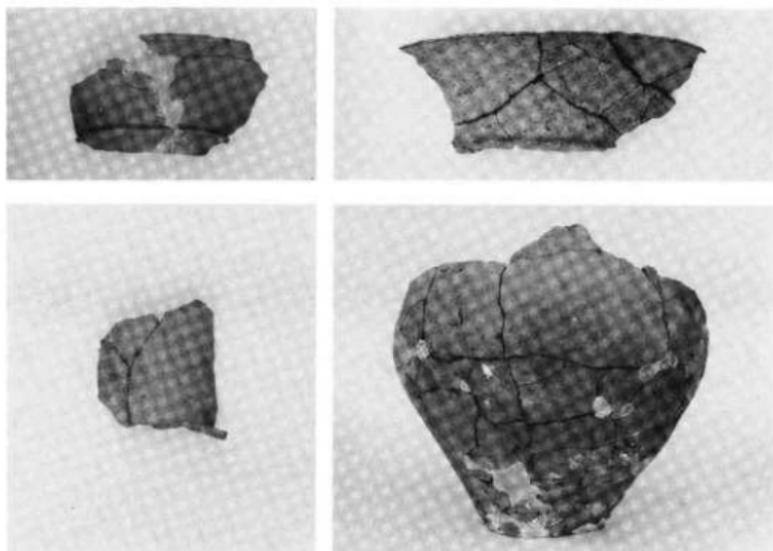
3. 体部で全形の約2分の1を残存しています。肩部には張りを持ち、下半分は真直にすばまります。底部は成形時よりつくることを意図しなかったもので、孔をあけたまま輪積みを行ったと考えられます。



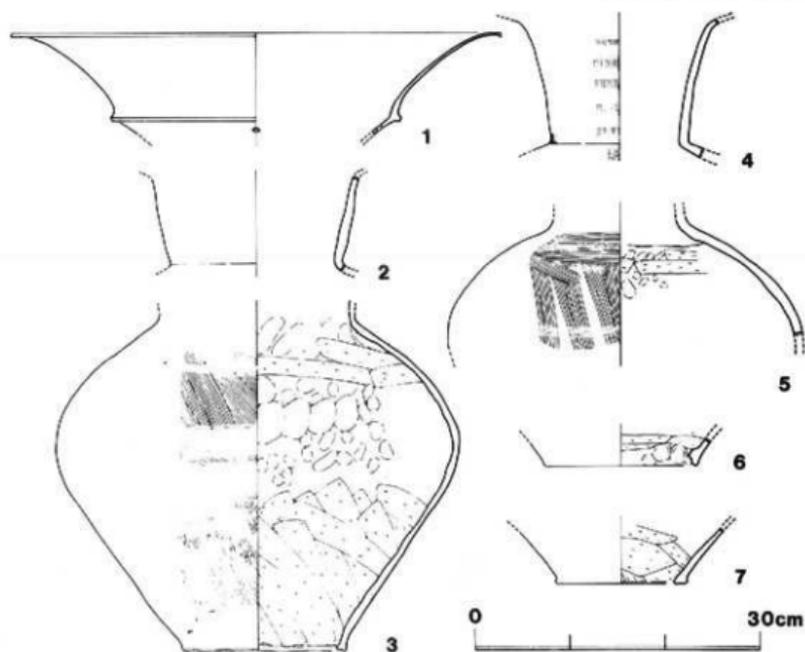
第18図 壺形埴輪出土状況

##### (2) 朝顔形埴輪 (第19図 8~15)

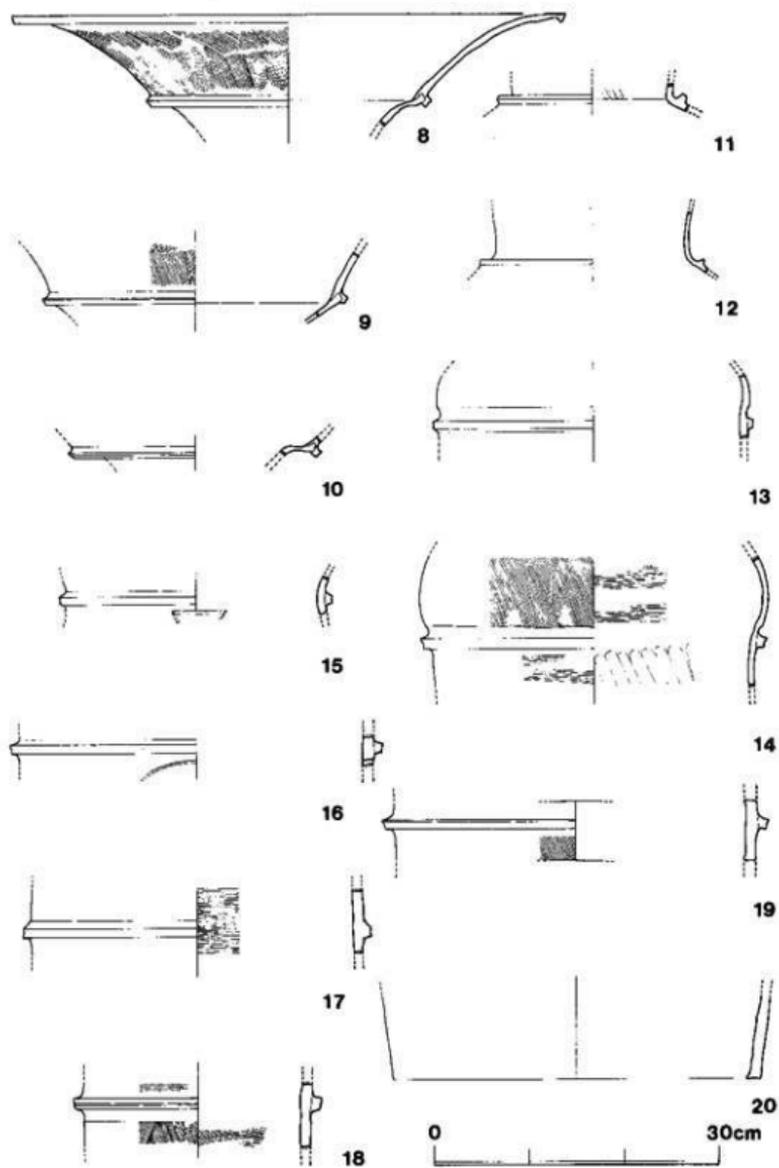
8~10は朝顔形埴輪の口縁部です。11・12はともに朝顔形埴輪の頸部です。肩部との境に突帯を有するが、形状を異にし、11は台形、12は三角形を呈します。また11はやや急角度で立ち上がるのに対し、12は丸みをもちます。13~15は朝顔形埴輪の肩部から胴部にかけての破片です。14・15は肩部にかなり丸みを帯び、古式の様相をうかがわせます。15は突帯直下に三角形の透孔を有し、突帯はいずれもやや下りぎみにつきます。16~20は中間段ならびに最下段の破片です。突帯はいずれも下りぎみにつき端面はナデにより凹み、透孔は19が三角形で、突帯を境として同一方向に穿つのに対して16はカーブの状態から円形あるいは半円形と見られます。



第17图 壺形埴輪



第18图 壺形埴輪実測图



第19圖 小石塚古墳出土輪軸実測図

## (2) 大石塚古墳

小石塚古墳同様、台地状地形からやや突出した独立丘陵の末端、標高約20m前後に立地し、西方向にゆるく地形が傾斜しています。調査前の状況において、葺石・埴輪片などは採集されませんでした。小石塚古墳にくらべて、比較的保存状態のよい古墳でした。調査の結果、だいたいの規模を復元することができました。ただ、前方部が削平され、まして境界外にのびるために全長と前方部幅は不明です。

### 1. 墳 丘

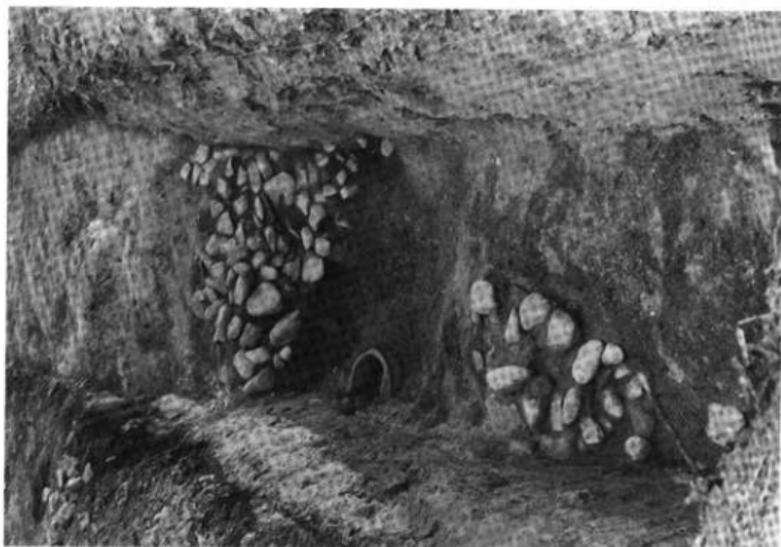
主軸線はN-10°-Eで、後円部三段築成の南面する前方後円墳です。東高西低という地形的な制約によって、東側と西側では各段に高低差が生じています。後円部径48m(推定)、くびれ部径22m(推定)、後円部高6m(西側基底部より)、前方部高2.8m(西側基底部より)です。盛土の状態は葺石、埴輪等が残存していましたので、表面観察にとどめました。



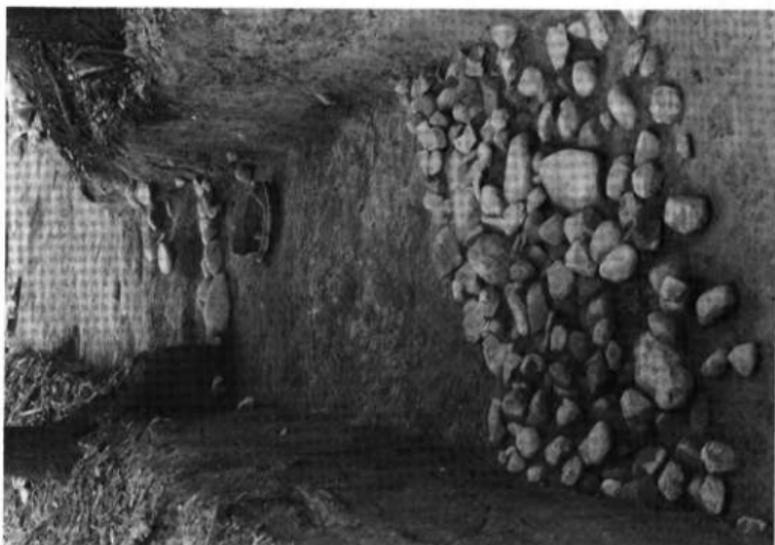
第20図 大石塚古墳 調査前の状況



第21図 第4トレンチ 西側部分 1段目葺石・埴輪



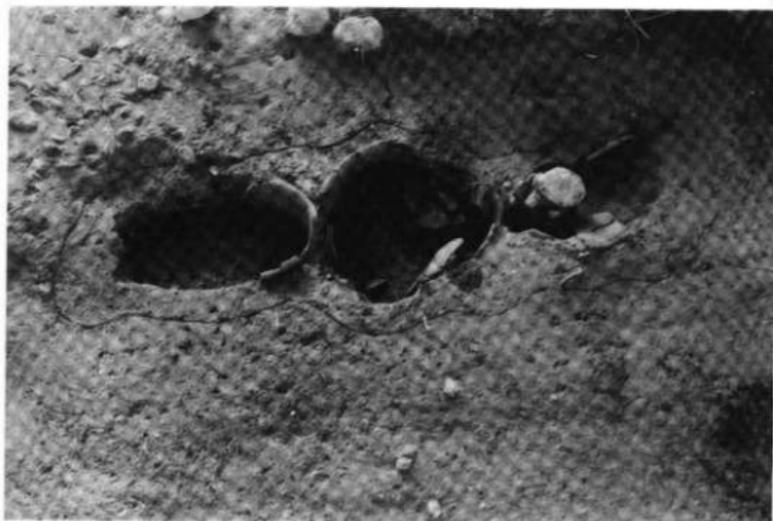
第22図 第2トレンチ 1段目葺石・埴輪



第23図 第6グリッド 西側くびれ部付近



第24図 第7トレンチ 墳丘



第25図 第4トレンチ東側部分 2段目テラス楕円形壇輪



第26図 第6グリッド 2段目テラス壇輪列